

義父と戻れない関係

夫不在の午後に始まる背徳の同居生活

こんな関係になるなんて、
思っていなかった。

夫のいない午後、

義父とふたりきりだった

——第一話——

その優しさが、

境界を壊した。

夫がいない午後。

ただそれだけの、はずだった。

なのに——

身体だけが、
先に思い出してしまう。

この家には、夫がいない。

それなのに私は、

どこかで見られているような気がして
いた。

昼下がりの静けさが、
家の中に沈んでいる。

時計の音だけが、
やけに大きく響く午後。

夫が海外へ単身赴任して、三年。

最初の頃は、ただ忙しかった。

子どものこと。

家のこと。

慣れない生活。

考える余裕なんて、なかった。

けれど——

気がつけば、

時間だけが余るようになっていた。

何かに追われることもなく、

誰かと話すこともなく、

ただ、過ぎていく午後。

その中で、ふと思う。

自分が「誰かの妻」である感覚が、

少しずつ薄れていることに。

四十を過ぎて、ようやく気づく。

何も変わっていないはずなのに、

何かだけが、

確実に抜け落ちていることに。

違和感は、いつからだろう。

夫からの連絡は減り、
言葉から温度が消えていた。

それは、いつからだろう。

そんな違和感が、

やがて確信に変わる日も、

来ると感じていた。

そんなある日。

思わぬ時間に、
夫からメッセージが届く。

『今日は疲れた。もう寝る』

短い一文。

それだけだった。
文脈のない、言葉。

何かおかしい。

いや、何もおかしくない。

そう思う。

そう思おうとする。

けれど——

その数秒後。

もうひとつ、メッセージが届く。

『次はいつ会える？』

一瞬、意味がわからなかった。

誰に向けた言葉なのか。

考えるより先に、
指が止まる。

そして——

『あ、ごめん。部下に送るつもりだった』

短い言い訳。

その軽さが、
逆に浮いていた。

“会う”相手。

その言葉の温度は、
仕事とは明らかに違う。

考えるまでもなかった。

(……ああ)

もう、わかってしまった。

さっきの一文。

この言い訳。

その間の、わずかな間。

すべてがつながる。

誰に向けた言葉なのか。

どんな関係なのか。

想像するまでもなく、理解できた。

胸の奥が、
静かに冷えていく。

怒りでもない。
悲しみでもない。

ただ——

何かが終わった、

という感覚だけが残る。

画面を閉じる。

何も言わない。

何も聞かない。

けれど——

諦めるしかない寂しさが、
静かに広がっていく。

それからしばらくして。

息子は大学へ進学し、

家を出ていった。

この家には今、
ふたりしかいない。

義父の、達彦。

最初は距離があった。

必要なことだけを話す関係。

食事の時間も静かで、
互いに踏み込まない距離。

けれど——

「体調、大丈夫か」

その一言だけが、
妙に心に残った。

夫とは違う、
落ち着いた気遣い。

それが、残る。

その日。

いつもと変わらない午後。

立ち上がろうとした瞬間——

「っ……！」

腰に、鋭い痛みが走る。

動けない。

崩れる。

(……まずい)

トイレに、行こうとしていた。

間に合わない。

焦りが、痛みと重なる。

「どうした」

すぐ近くで声。

達彦だった。

「……大丈夫です」

言えばいい。

けれど——

言えない。

「……少し、動けなくて……」

曖昧な言葉。

それでも——

迷いなく、距離が詰まる。

「無理するな」

低い声。

そのまま——

身体が、支えられる。

近い。

想像よりも、ずっと近い。

「歩けるか」

「……はい」

一歩。

痛み。

崩れる。

そのたびに、引き寄せられる。

離れられない距離。

触れていないのに、

体温だけがすぐそこにある。

トイレの前。

ここまでは来た。

けれど——

問題は、ここからだった。

座る。

わずかな安堵。

けれど、すぐ消える。

自分では、できない。

その事実が、落ちてくる。

時間がない。

「……すみません」

声が、小さくなる。

沈黙。

「……少し待ってろ」

足音が遠ざかる。

戻る気配。

そして——

バスタオルが、そっと掛けられる。

視線を遮るように。

見えない。

見えないはずなのに——

内側で起きていることだけが、
はっきりと意識に残る。

「……動かすぞ」

返事はできない。

ただ、任せるしかない。

逃げ場のない状態で、

すべてを委ねている。

触れてはいけないはずの距離で——

それを、

はっきりと理解してしまう。

その事実気づいた瞬間、

呼吸が浅くなる。

(仕方ない……)

そう思う。

けれど——

感覚だけが、追いかけてくる。

どこに触れられているのか、

考えないようにしても、

わかってしまう。

言葉も、音もない。

ただ、時間だけが長く感じられる。

やがて――

終わる。

動けない。

(今のは……)

わかっている。

何が行われたのか。

どこまで任せたのか。

けれど——

それ以上に残るのは、

嫌ではなかった、
という感覚だった。

(違う……)

否定しようとする。

これはただの出来事だと。

けれど——

身体の奥に残った感覚が、
それを許さない。

何も変わっていないはずなのに。

それでも――

もう、同じではいけない。

そして気づく。

あの距離を――

拒まなかった自分に。

何もなかったはずの、そのあとで

——第二話——

戻らないのは、出来事ではなく
自分の感覚だった。

何もなかったはずなのに——

身体だけが、覚えていた。

朝の光は、

昨日と何も変わらない。

カーテンの隙間から差し込む光。

台所に立ち上る湯気。

いつもと同じ、
静かな朝。

それなのに——

千里の中では、
何かがはっきりと変わっていた。

原因は、
考えるまでもない。

昨日の出来事。

あの時間。

あの距離。

ただの介助だったはずだ。

そう理解している。

そう思わなければいけない。

けれど——

触れられていないはずの感覚だけが、

身体の奥に残っている。

思い出すたび、

呼吸がわずかに浅くなる。

(違う……)

頭では否定する。

あれは特別なものではないと。

そう思い込もうとする。

けれど——

身体が、それを認めてしまっている。

その事実が、

何よりも戸惑いだった。

誰かに触れられたいと思ったことを、
認めたくない。

それが誰であっていいと、
思いかけている自分がいることも。

食卓に向かう。

椅子に座る。

目の前には、
いつもと同じように新聞を広げる達彦。

「……腰はもういいのか」

変わらない声。

落ち着いた調子。

「はい……だいぶ」

短く答える。

それ以上は、続かない。

目を合わせない。

合わせてしまえば、

何かが崩れてしまいそうだった。

箸を動かす。

味はする。

けれど、どこか遠い。

意識が、食卓ではなく――

昨日の距離に、引き戻される。

何度も同じ場面が浮かび、

消えない。

(何もなかった)

そう思う。

そう決める。

ただの出来事。

それ以上ではない。

そう言い聞かせながら、

食事を終える。

席を立つ。

そのとき――

背中に、視線を感じる。

振り向かなくてもわかる距離で、
意識だけが反応する。

ゆっくりと、

台所へ向かう。

午前中は、動き続けた。

洗濯。掃除。細かな用事。

同じ空間にいないように。

できるだけ距離を取るように。

けれど——

姿が見えなくても、

どこにいるのかがわかってしまう。

そのこと自体が、
意識を強くする。

(おかしい……)

こんなはずではなかった。

ただ同じ家で暮らしているだけなのに。

どうして、こんなにも気になるのか。

昼過ぎ。

キッチンに立つ。

上の棚に手を伸ばす。

届かない。

そのとき――

背後に、気配。

わかる。

達彦だ。

「それ、上の棚か」

すぐ後ろから声。

距離が、近い。

「え、あ……はい」

振り向けない。

腕を伸ばす。

届かない。

少し背伸びする。

その瞬間——

背後から、腕が伸びてくる。

身体のすぐ横を通る気配。

思考が、止まる。

距離が、一気に縮まる。

ほとんど重なるような位置。

逃げられるはずなのに、
足が動かない。

息が、止まる。

腕が棚に届く。

物が取られる。

それだけのはずなのに——

その近さだけが、残る。

触れていない距離で、

気配だけがまとわりつく。

その瞬間——

ほんのわずかに、触れる。

意識してしまう程度の接触。

それが、はっきりと残る。

身体が、反応する。

すぐに離れる。

距離が戻る。

けれど——

戻らない。

(今のは……)

偶然ではない。

そして——

自分が、拒まなかったことにも気づく。

拒めたはずだった。

避けることもできた。

それなのに——

しなかった。

その事実が、

はっきりと残る。

その場に立ったまま、

しばらく動けない。

静かなキッチン。

千里は、
ゆっくりと息を吐く。

夫が今どこで、
誰と過ごしているのか。

考えないようにしていたのに、
浮かんでしまう。

もう――

何もなかったことには、できない。

戻れない距離の、その先で

——第三話——

偶然ではないと、
身体が先に知っていた。

避けようとするほど、

意識は強くなる。

朝から、
どこか落ち着かなかった。

いつも通りに動いているはずなのに、

ふとした瞬間に思考が止まる。

何をしていても、
気配を探してしまう。

どこにいるのか。

今、何をしているのか。

見なくても、わかる。

それが、

余計に意識を強くする。

(こんなはずじゃ……)

ただ同じ家で暮らしているだけのはず
なのに。

昨日までは、
それでよかったはずなのに。

思い出すのは、
キッチンでの一瞬。

あの距離。

あの近さ。

そして——

触れたかどうか曖昧な、

あの感覚。

触れていないはずなのに、

身体の奥に、
じわりと残っている。

思い出すたび、
呼吸が浅くなる。

胸の奥が、
わずかに熱を持つ。

頭では理解している。

あれは偶然だったと。

そう思わなければいけないと。

けれど――

どこかで、わかっている。

完全な偶然ではなかったことを。

午前中。

落ち着かないまま、

リビングに入る。

何かしていないと、

余計なことを考えてしまう。

ふと、天井の照明に目が留まる。

電球が切れている。

(今のうちに……)

誰もいないうちに、

済ませてしまおうと思う。

脚立を持ってくる。

広げる。

ゆっくりと足をかける。

上る。

腕を伸ばす。

あと少し。

そのとき――

わずかに、身体が揺れる。

バランスが崩れそうになる。

その瞬間——

「危ない」

声と同時に、
身体が止まる。

腰のあたりに、

しっかりと手が添えられる。

逃げ場のない位置で、支えられる。

息が止まる。

振り向けない。

振り向けば、
距離を直視してしまう。

「そのまま、動くな」

低い声が、すぐ後ろで響く。

触れているのは一部のはずなのに、

背中全体が、
熱を帯びたように感じる。

その手は、

必要以上に離れない。

離れる理由があるのに——

離れない。

支えるには、
十分なはずなのに——

わずかに、長い。

電球に手を伸ばす。

回す。

指先に意識を集中させる。

それだけに集中すればいい。

そう思うのに——

支えられている感触が、
どうしても離れない。

(離れて……)

そう思う。

そう思うのに——

言えない。

離れてしまえば、
落ちるかもしれない。

そう考えると、
拒むことができない。

交換を終える。

「……取れたか」

「……はい」

声が、少し低くなる。

ゆっくりと、脚立を降りる。

床に足がつく。

それで終わるはずだった。

けれど——

手は、すぐには離れない。

ほんの一瞬。

指先が、わずかに動く。

確かめるような感触。

その一瞬だけで、十分だった。

やがて、手が離れる。

距離が戻る。

空気が、元に戻る。

はずなのに——

(戻ってない……)

はっきりと、わかる。

今のは、偶然ではない。

必要はあった。

それは間違いない。

けれど――

その必要以上に、触れていたことも、

わかってしまう。

午後。

台所に立つ。

包丁を握る。

野菜を切る。

一定のリズム。

同じ動作の繰り返し。

それなのに――

意識が、どこかに逸れている。

手元が、わずかに遅れる。

(……だめだ)

考えないようにしても、浮かんでくる。

昨日のこと。

あの距離。

そして――

自分が、拒まなかったという事実。

そのとき。

指先が、わずかに狂う。

コップが手に当たる。

カラン、と音を立てて落ちる。

「っ……」

反射的に、身体が動く。

落ちたコップに手を伸ばす。

その瞬間——

足が、滑る。

床が濡れている。

さっきの水だったのか。

それとも——

考える余裕はない。

踏ん張れない。

体勢が、崩れる。

(——倒れる)

そう思った瞬間。

身体が、止まる。

強く、引き寄せられる。

腰に、腕。

背中に、もう一方の手。

抱きかかえられるようにして、
支えられる。

「……危ない」

すぐ近くで、低い声。

息が触れる距離。

完全に、体重が預けられている。

自分では、立てない。

そのまま――

身体が、密着する。

離れようとする。

足に力を入れる。

けれど――

まだ滑る。

わずかに、ぐらつく。

「……まだ動くな」

短く、制される。

そのまま、支えられる。

腕が、離れない。

必要だから。

そう思う。

そう思うのに——

距離が、近すぎる。

呼吸が、重なる。

触れていないはずなのに——

身体が、

それを否定しない。

逃げ場が、ない。

もう、戻れなかった。

胸元に触れている感覚。

背中に回された手の位置。

すべてが、

はっきりと意識に残る。

呼吸が、合う。

近すぎて、逃げ場がない。

そのまま、

ゆっくりと体勢を戻される。

急がない。

慎重に。

時間をかけて。

滑らないように。

それは、わかっている。

けれど――

(……長い)

終わるまでの時間が、

やけに長く感じる。

ようやく、足が安定する。

立てる。

はずだった。

力が抜ける。

ほんのわずかに、バランスを崩す。

その瞬間——

もう一度、

強く引き寄せられる。

「っ……」

さっきよりも、近い。

完全に、重なる。

腕の中に、収まる。

逃げ場が、ない。

今度は、すぐには離れない。

支える必要は、

もうないはずなのに——

離れない。

ほんの数秒。

それだけ。

それだけなのに——

長い。

何も言えない。

何も言わない。

呼吸だけが、近い。

やがて——

力が、ゆっくりと抜ける。

腕が、離れる。

距離が、戻る。

はずなのに——

戻らない。

空気が、変わっている。

さっきまでとは、

明らかに違う。

「……すまん」

低い声。

短い一言。

けれど——

それは、謝罪ではない。

止める言葉でもない。

むしろ——

ここから先を、

残したままの言葉だった。

千里は、その場で動けない。

(今のは……)

もう、わかっている。

偶然ではない。

ただの事故でもない。

そして——

自分が、それを拒まなかったことも。

胸の奥に、熱が残る。

消えない。

消そうとしても、残る。

その感覚が、はっきりとわかる。

静かな台所の中で、

千里はゆっくりと息を吐いた。

もう――

ただの出来事では、終わらない。

その一線を、越えるのは——

——第四話——

選ばされたのではなく、
自分で選んだ。

逃げようと思えば、
逃げられた。

それでも——

逃げなかったのは、

自分だった。

朝から、

落ち着かなかった。

理由は、考えるまでもない。

昨日のこと。

あの距離。

あの沈黙。

そして――

自分が、

拒まなかったという事実。

(……違う)

そう思う。

あれは流れだった。

仕方のない状況だった。

そう思おうとする。

けれど——

頭の奥に、
別の記憶が浮かぶ。

昨夜。

あのあと。

眠れなかった。

何度も、同じ場面が繰り返される。

キッチン。

滑りそうになった瞬間。

支えられた距離。

触れていないはずの場所にも、
残っている感覚。

(どうして……)

問いが浮かぶ。

けれど——

その答えを探すように、

気づけば足は、
書齋へ向かっていた。

夫の部屋。

普段は入らない場所。

ドアを開ける。

空気が、違う。

誰もいないのに、
“いる”気配だけが残っている。

机の上。

パソコン。

触れてはいけないと、
どこかで思っていた。

(……少しだけ)

理由は、はっきりしない。

ただ――

確かめたかった。

何をかは、わからないまま。

手が伸びる。

開く。

ログイン画面。

パスワード。

夫が昔から使っていたもの。

入力する。

画面が切り替わる。

ログイン完了。

見慣れない世界。

夫の中の、
もうひとつの生活。

仕事のファイル。

変わらないデスクトップ。

(……何もない)

そう思いかけた、そのとき。

メールが目に入る。

開く。

『ご注文ありがとうございます』

件名だけで、理解する。

女性用のアクセサリー。

高価なネックレス。

(……私じゃない)

その瞬間、
違和感は確信に変わる。

さらに視線が下がる。

送付先。

知らない名前。

知らない住所。

海外。

(……ああ)

もう、考える必要はなかった。

私へのものではない。

間違いでもない。

“誰か”がいる。

はっきりと。

胸の奥で、
何かが静かに崩れる。

怒りでもない。

悲しみでもない。

ただ――

納得だけが残る。

(……だから)

昨日のことが、浮かぶ。

キッチン。

あの距離。

支えられた感触。

(……あのとき)

なぜ、拒まなかったのか。

その理由が、
遅れて理解される。

(……もう、終わっていたからだ)

そこまで考えて、

ようやく気づく。

自分が確かめたかったもの。

それは、夫ではない。

自分の中の変化だった。

メールを閉じる。

何もなかったように。

けれど——

もう、戻らない。

そして今。

リビング。

座ることもせず、
立ったままにいる。

何を待っているのか。

何もしていないのに、

時間だけが過ぎる。

——待っている。

それを、自分でも理解していた。

足音。

近づく。

わかる。

顔を上げる。

入ってくる。

目が合う。

逸らさない。

ほんの一瞬の沈黙。

「……昨日のこと」

言葉が、途中で止まる。

何を言おうとしていたのか、
わからなくなる。

ここで終わらせることもできる。

何もなかったことにすることもできる。

それでも――

その言葉を、選ばない。

一歩。

距離が縮まる。

迷いはない。

さらに、一歩。

近い。

息が触れる距離。

逃げれば終わる。

ここで下がればいい。

それでも――

動かない。

そのとき。

「……嫌なら、言え」

低い声。

選択が、突きつけられる。

ここで終わるか。

進むか。

最後の境界。

頭では、わかっている。

それでも――

身体が、先に動く。

ほんのわずかに。

首が、横に振られる。

そのとき――

もう、

戻れないとわかっていた。

それでも、

拒まなかった。

このあと——

もう戻れないところまで、
進んでしまう。

その一線を越えた先は、
本編で。